Photo Topics

スイス捜索救助犬協会の来日を機に、災害救助犬ネットワークがサーチ&レスキュー研修会を実施

「月刊消防」編集室

令和5年5月2日（火）に、千葉県消防学校にてNPO法人災害救助犬ネットワーク（DRDN）が企画運営するサーチ&レスキュー研修会が行われ、DRDNや渋川広域消防本部、木更津市消防本部などから40名が参加した。

今回のサーチ&レスキュー研修会には、スイス捜索救助犬協会（REDOG）で捜索隊長を務め、東日本大震災の際に支援隊として参加されていたLinda Hornisberger氏など3名が来日して参加した。REDOGの3名は、午前中に実施された災害救助犬の育成や災害現場における活動要領、事例の紹介といった講義の講師を務めたほか、午後の訓練では、設定（要救助者を隠す場所の決定や訓練想定）を担当した。

訓練の参加隊は当日の12時が初顔合わせで、事前打ち合わせはなし。同じ消防組織ではあるがエリアが違い、普段は交流もない組み合わせで行った。

通常の訓練では時間的な制約があり、時間内で訓練が目的に沿った形で完結するように行われていることが多いが、実際の現場では訓練のように対応することができないケースがほとんどであると考えられることから、実戦的にするために、できる限り事前に情報を提供せず訓練を実施した。その結果、今回の訓練が時間内に要救助者を全員救出できない結果になったとしても、今回の経験が今後の活動に必ず生きるはずとの主催者（DRDN&REDOG）の意向に基づいた方針によるもの。

今回の訓練は、現場の指揮は渋川広域消防本部が担い、捜索は災害救助犬ネットワークの救助犬を活用して実施。要救助者が発見されたら木更津市消防本部救助隊が救出するという流れで行われた。

訓練は13時20分に渋川広域消防本部指揮隊が現場に到着したところから始まった。現場で呼びかけたところ、2人の住民（REDOG）が「早く探せ、確認できない人が5人以上いる」と迫り、現場へ入ろうとするのを指揮隊が制止することが最初の活動となった。10分後に木更津市消防本部の救助隊、救助犬が到着し、すぐに、救助犬2頭が捜索に着手、5分後に2人の居場所を告知、救助隊に引き継いだ。要救助者の救出結果については次のとおりだった（「千葉県消防学校震災訓練場」の番号の位置も参照）。

・1人目：土手の中から30分後に救出。
・2人目：生存確認は比較的すぐにできたが、救出に手間取り、14時58分に瓦礫の中から救出。
・3人目：救助犬が反応は示すが明確な告知が得られず、14時救助隊が資器材を使って要救助者の生存を確認、救助作業に入り、14時53分に救出。
・4人目：捜索救助の作業中の混乱に乗じて1人が行方不明になったとの新たな情報から捜索し、救助犬が発見、救出した。

表　参加者内訳

スイス捜索救助犬協会（REDOG）	3名
渋川広域消防本部指揮隊	4名
木更津市消防本部救助隊	15名
災害救助犬ネットワーク（DRDN）	15名
通訳	3名

訓練を終えて「災害救助犬ネットワーク」

DRDNとREDOGは2018年に連携協定を締結しています。令和4年度はDRDNがスイスITWに訪欧しました。今年はREDOGが来日しましたが、その目的は日本の災害救助犬の認知、意識向上とスキルアップ、もう一つはREDOGが日本の災害支援で来日したときに現場活動が効率的にできるように防災機関、救助隊との交流、理解を深めるためです。

今回行った訓練の事後検証は、これから3者で行う予定ですが、それぞれが改善すべきところがあるはずです。私たち救助犬は、災害場所によってどの消防と連携するのかわかりません。消防機関は全国700余ありますが、そのすべてと機能的に連携できるかは不透明です。救助犬の能力を効果的、効率的に活用することができるように、消防本部や現場部隊の理解が進むことを願っています。

訓練を実施した「千葉県消防学校震災訓練場」。写真上に付記された数字は、要救助者がいた場所を示す。

①の告知

要救助者を早く救出するよう詰め寄る関係者をなだめる指揮隊。

②要救助者への告知

②の救出

③要救助者への反応を示す

③の救出

③要救助者の場所を特定する